

学位論文

日本語とインドネシア語の謝罪行動の対照研究

広島大学大学院教育学研究科

文化教育開発専攻（日本語教育学分野）

NURIA HARISTIANI

I 論文題目

日本語とインドネシア語の謝罪行動の対照研究

II 論文構成(目次)

第1章 序論

- 1.1 研究の背景と目的
- 1.2 論文の構成

第2章 謝罪に関する先行研究と問題提起

- 2.0 はじめに
- 2.1 謝罪意識に関する研究
- 2.2 謝罪行動に関する研究
 - 2.2.1 謝罪する側の言語行動に焦点を当てる研究
 - 2.2.2 謝罪する側と謝罪を受ける側の言語行動に焦点を当てる研究
 - 2.2.3 インドネシア語の謝罪行動に関する研究
- 2.3 フェイス概念に関する研究
 - 2.3.1 Goffman の面目理論
 - 2.3.2 Brown & Levinson のフェイス概念
- 2.4 先行研究における問題点と本研究の問題提起

第3章 日本語とインドネシア語における謝罪意識の比較

- 3.0 はじめに
- 3.1 研究方法
 - 3.1.1 調査協力者と調査期間
 - 3.1.2 調査における場面設定
 - 3.1.3 調査における対象意識
- 3.2 結果と考察
 - 3.2.1 「金・小」場面における意識の異同
 - 3.2.2 「金・大」場面における意識の異同
 - 3.2.3 「時・小」場面における意識の異同
 - 3.2.4 「時・大」場面における意識の異同
- 3.3 まとめ

第4章 日本語とインドネシア語における「謝罪者」と「被謝罪者」の言語行動の比較

- 4.0 はじめに
- 4.1 研究方法

- 4.1.1 調査協力者と調査期間
- 4.1.2 調査における場面設定
- 4.1.3 調査の手続き
- 4.2 分析方法
- 4.3 日本語とインドネシア語における「謝罪者」の言語行動
 - 4.3.1 意味公式の定義と使用例
 - 4.3.2 全場面における意味公式の使用比較
 - 4.3.3 「明確な謝罪表明」の使用傾向
 - 4.3.4 「責任への言及」の使用傾向
 - 4.3.5 「過失修復の試み」の使用傾向
 - 4.3.6 まとめ
- 4.4 日本語とインドネシア語における「被謝罪者」の言語行動
 - 4.4.1 意味公式の定義と使用例
 - 4.4.2 全場面における意味公式の使用比較
 - 4.4.3 「譲歩」の使用傾向
 - 4.4.4 「非難」の使用傾向
 - 4.4.5 「問題解決への言及」の使用傾向
 - 4.4.6 まとめ

第5章 日本語とインドネシア語の謝罪行動における相互行為

- 5.0 はじめに
- 5.1 日本語とインドネシア語の謝罪会話の【開始部】におけるの言語行動
 - 5.1.1 日本語とインドネシア語の謝罪会話における挨拶行動
 - 5.1.1.1 意味公式の分類
 - 5.1.1.2 意味公式の使用比較
 - 5.1.2 日本語とインドネシア語の謝罪会話における前触れ行動
 - 5.1.2.1 意味公式の分類
 - 5.1.2.2 意味公式の使用比較
- 5.2 日本語とインドネシア語の謝罪会話の【中心部】における言語行動
 - 5.2.1 「明確な謝罪表明」と「譲歩」の出現位置
 - 5.2.1.1 「明確な謝罪表明」の出現位置
 - 5.2.1.2 「明確な謝罪表明」の出現位置による使用の比較
 - 5.2.1.3 「譲歩」の出現位置
 - 5.2.1.4 「譲歩」の出現位置による使用の比較
 - 5.2.2 「謝罪者」と「被謝罪者」の相互行為
 - 5.2.2.1 謝罪が明確に成立した会話におけるやりとり
 - 5.2.2.2 謝罪が明確に成立しなかった会話におけるやりとり
 - 5.2.3 「明確な謝罪表明」と「譲歩」に関するやりとり

- 5.2.3.1 「明確な謝罪表明」の直前・併用・直後に用いられる意味公式
- 5.2.3.2 「譲歩」の直前・併用・直後に用いられる意味公式
- 5.3 日本語とインドネシア語の謝罪会話における【終結部】の言語行動
 - 5.3.1 意味公式の分類
 - 5.3.2 意味公式の使用比較
- 5.4 まとめ

第6章 結論

- 6.0 はじめに
- 6.1 日本語とインドネシア語の謝罪行動とフェイス概念
- 6.2 日本語とインドネシア語の謝罪行動と謝罪意識
- 6.3 日本語教育への示唆
- 6.4 今後の課題

参考文献

付録資料

III 論文要旨

第1章 序論

人は相手に損害を与えたり、不快な思いをさせた場合、その状況を適正なものにしようと「修復行動」(remedial work)を行う(Goffman, 1971)。Barnlund & Yoshioka (1990)は、純粋な謝罪には(a)他人を身体的、社会的、あるいは精神的に傷つけたと気づき、(b)その損失や傷に対して直接的または間接的に責任があると意識し、(c)自覚をすることが義務であるという認識が必要だと述べている(p.194)。要するに、これらの意識がなければ謝罪は必要だと思われず、謝罪行動が行われぬ可能性があるということが考えられる。

謝罪に関する従来の研究では、謝罪ストラテジーと謝罪定型表現に関するものがほとんどであり、謝罪意識を取り上げている研究はまだ多いとは言えない。しかし、鄭・上原(2005)は、内面的な謝罪意識は必ず謝罪行動と繋がるとは限らないが、謝罪行動に対して影響を与える可能性があり、謝罪行動の解明には謝罪の意識からの研究視点も重要だと指摘している。

また、謝罪行動を取り上げる研究では謝罪する側の言語行動のみが対象とされているものが主流であり、謝罪を受ける側の言語行動や謝罪する側と謝罪を受ける側の相互行為に着目する研究はほとんど見当たらない(ボイクマン・宇佐美 2005)。しかし、謝罪行動では、謝罪する側の行動が単独ではなく、謝罪を受ける側の行動により大きく影響される可能性があると考えられる。大谷(2008)は、謝罪とは、受け手に受け入れられてはじめて達成される行為であり、受け手の反応や、送り手-受け手間の相互行為を無視することができないと述べている。さらに大谷(2008)は、送り手がいくら適切に謝罪を行ったつもりでも、それが本当に適切であったか否かは受け手の反応を見なければ判断できないと述べ、謝罪を受ける側の言語行動を研究する重要性について指摘している。謝罪を受ける側の言語行動、および謝罪する側と謝罪を受ける側の双方のやりとりを研究する必要があるという課題は、謝罪研究を概観した研究の中でもしばしば取り上げられる(Olshtain 1989、杉本 1997、熊谷 1993、大谷 2008 など)。

以上を踏まえて、本研究では謝罪場面における謝罪する側(以下では「謝罪者」と表記)および謝罪を受ける側(以下では「被謝罪者」と表記)の言語行動を観察したうえ、双方の言語行動を相互行為の観点から分析し、両言語における謝罪のやりとりに関する類似点・相違点を明らかにしていく。最後に、両言語における謝罪行動をフェイス概念の観点から分析し、両言語の謝罪行動に関する文化的背景及び特徴を明らかにすることを目的とする。

第2章 謝罪に関する先行研究と問題提起

第2章では、謝罪に関する研究を整理した。謝罪に関する研究に関して、(1)謝罪意識の研究、(2)謝罪行動の研究および(3)フェイス概念に関する研究を概観した。謝

罪意識の研究では、鄭・上原（2005）、鄭（2006）、大谷（2004）とナビル（2007）を取り上げる。謝罪意識に関しては、「謝る意識」と「罪悪感」は予測的な関係にあるとされる（鄭・上原 2005、鄭 2006 など）。大谷（2004）はそれに加え、日本語話者は「迷惑」が謝罪における心理要因となっているとしている。これらの研究では、「謝罪者」の意識のみが対照とされている。しかし、「謝罪者」と「被謝罪者」の意識は同じであるか。また、謝罪意識と謝罪行動はどのように関連しているかという課題が残されている。謝罪行動に関しては、日本人の謝罪行動の特徴として、①謝罪定型表現を多用する、②説明を行わない、③単純なストラテジーを用いるということが指摘されている（Barnlund & Yoshioka 1990、池田 1993、ボイクマン・宇佐美 2005、大橋 2007、鄭 2011 など）。インドネシア語の謝罪行動については、①謝罪定型表現を多用する、②説明を多く行う、③呼称を多用することが指摘されている（橋元 1992、橋元他 1992、高殿 1999）。しかし、これらの謝罪の研究では、謝罪する側の言語行動のみが対象とされるものが多く、謝罪を受ける側の言語行動について取り上げる研究は多いとは言えない。また、謝罪する側と謝罪を受ける側の言語行動を取り上げる研究（ボイクマン・宇佐美 2005、鄭 2011）では、双方のやりとりについて指摘されないという課題が残されている。これらを踏まえて、本研究では以下の問題提起を行った。

1. 日本語とインドネシア語の謝罪意識を明らかにする。また、謝罪する側の意識だけでなく、謝罪を受ける側になった場合の意識も探り、双方の意識には相違点があるのか。また、謝罪意識と謝罪行動はどのように関連しているのか。
2. 日本語とインドネシア語の謝罪行動を明らかにするために、謝罪する側のみならず、謝罪を受ける側の言語行動も分析する。
3. 日本語とインドネシア語の謝罪の談話構造を明らかにするために、謝罪する側と謝罪を受ける側のやりとりを考察し、双方の言語行動は関連しているのかを検討する。
4. 謝罪はフェイスの問題として考えると、相手のフェイスを尊重すると同時に自分のフェイスを損なうことになる相互作用であることが指摘され（Brown & Levinson、1987）、フェイス概念と深く関わっている（池田1993）。従って、日本語とインドネシア語では、謝罪する側と謝罪を受ける側はどのようにお互いのフェイス維持を行っているか、その類似点、相違点を明らかにする。

第3章 日本語とインドネシア語における謝罪意識の比較

第3章では、日本語とインドネシア語の謝罪意識の比較を試みた。意識調査では、「謝罪意識」・「罪悪感」・「迷惑度合い」の3意識を対象とし、さらに、日本人が好まないと先行研究で多く指摘される「説明」の使用意識と先行研究の結果で二通りの結果が指摘される「賠償」の使用意識についても検討した。調査協力者には、自分が「謝罪者」または「被謝罪者」になった場合を想像してもらい、5つの意識に関して1～4段階の評価をつけてもらった（1=最低値～4=最高値）。場面設定では、「親しい同性の友人」という人間関係を設定し、謝罪の事柄が異なる4場面である：①「借りた500円が返せ

ない」場面、②「借りた1万円が返せない」場面、③「15分遅刻した」場面、④「1時間遅刻した」場面を取り上げた。これらの場面設定を設けた理由は、日常生活で起こり得る状況および保ちたいと思われる人間関係を場面設定に取り入れることが重要とされているからである（Sugimoto2001）。

意識調査の結果から、両言語ともに類似した傾向を示している。日本語とインドネシア語ともに全4場面を通して、相手に求める意識より自分に対する意識の方が強かった。すなわち、日本語とインドネシア語では、これらの謝罪場面におかれた場合、自分が深く罪悪を感じ、その意識に基づいて謝罪したり、理由を述べたり、代償を申し出たりすることはあるが、相手に対しては必ずしも同様のことを同程度で求める訳ではない。インドネシア語では、自分に対する意識と相手に対する意識の差が日本語のそれと比べて低く、自分が持つ意識と同程度の意識および行動を相手にも求めている可能性がある。場面別における謝罪意識を見ると、謝罪の事柄が重くなればなるほど、自分が意識する謝罪の必要性、罪悪感、相手への迷惑度合い、説明する必要性と賠償する必要性が高くなり、相手にも同程度で同様の意識を期待していることが明らかになった。

また、日本語の結果に関して、「説明」の使用意識を見ると、4場面を通して「謝罪」と同程度に意識されているということが分かった。この意識の結果は「日本人はあまり「説明」を行わない」という謝罪行動に関する指摘（池田 1993、阿部 2006 など）を支持していない傾向を示す。また、「賠償」の使用意識を見ると、謝罪の事柄が大きい場合の方が小さい場合より使用意識が高く、謝罪の事柄が大きい場合には相手に償う可能性が高いと考えられる。

第4章 日本語とインドネシア語における「謝罪者」と「被謝罪者」の言語行動の比較

第4章では、日本語とインドネシア語における「謝罪者」と「被謝罪者」の言語行動の実態を把握することを目的とし、日本語母語話者とインドネシア語母語話者を対象に、ロールプレイの調査を実施した。調査協力者は各々、日本語母語話者女性10組と男性10組（計20組）およびインドネシア語母語話者女性10組と男性9組（計19組）であった。

本調査では日本語とインドネシア語の謝罪行動を明らかにするために2段階の調査、調査〔1〕ロールプレイと、調査〔2〕フォロー・アップ・インタビューを行った。ロールプレイでは、意識調査と同様の場面設定を用い、「親しい同性の友人同士」の人間関係を設けた。さらに、①「借りた500円が返せない」場面、②「借りた1万円が返せない」場面、③「15分遅刻した」場面、④「1時間遅刻した」場面における会話をしてもらった。ロールプレイで収集した会話データは意味公式による分類方法を用いて分析を行った。

日本語とインドネシア語の謝罪会話の開始部分から終了部分まで「謝罪者」が行った発話は意味公式方法によって分類した結果、11種類の意味公式を用いていることが明確になった。

全体的な意味公式の使用傾向から、日本語とインドネシア語の「謝罪者」が用いている意味公式の種類は類似している。多用される意味公式も両言語で同様であり、「明確な謝罪表明」・「説明」・「過失修復の試み」と「責任への言及」の4種類である。しかし、その中で最も多く使用される意味公式は日本語では「明確な謝罪表明」であるのに対し、インドネシア語では「説明」であり、異なっている。また、「過失修復の試み」は両言語で多かったが、内容には差が見られた。相手の過失を修復するために、日本語では代償を提供する、または代償の要求を受け入れることが多用され、謝罪するに当たって有効な戦略とみなされるが、インドネシア語ではそうではなかった。日本語に関するこの結果はBarnlund & Yoshioka (1990)の結果を支持しており、池田 (1993)の結果と異なる傾向を示している。一方、インドネシア語会話では、日本語会話より多用される意味公式は、「相手の攻撃弱体化」と「相手配慮」の意味公式である。また、インドネシア語では謝罪を遂行するに当たって、「謝罪者」は様々な謝罪戦略を工夫して戦略的に謝罪行動を行っている姿勢を見せている。

本研究の結果から、日本語の「謝罪者」が「明確な謝罪表明」を多く用いている傾向が見られたが、この結果は先行研究で指摘されている結果 (Barnlund & Yoshioka 1990、池田 1993、ボイクマン・宇佐美 2005、鄭 2011 など) をさらに補強するものである。インドネシア語でも「明確な謝罪表明」が多用されることは先行研究で指摘されたことと一致している (橋元 1992、高殿 1999 など)。しかし、本研究の結果で日本語の「謝罪者」が「説明」を多用していることについては先行研究で指摘されている結果 (Barnlund & Yoshioka 1990、池田 1993、阿部 2006 など) と異なる傾向を示している。

さらに、日本語とインドネシア語の謝罪会話の開始部分から終了部分までの「被謝罪者」が行った発話を意味公式によって分類した結果、9種類の意味公式を用いていることが分かった。

「被謝罪者」が用いた意味公式の全体的な使用傾向から見ると、日本語とインドネシア語会話で顕著な差が見られた。日本語では「被謝罪者」が「譲歩」と「確認」を多用するのに対し、インドネシア語では「譲歩」・「情報要求」・「非難」・「説明」と「問題解決への言及」の5種類を多用している。要するに、日本語の「被謝罪者」は許しを表明することを優先しており、さらに「確認」を多用することにより相手の状況を理解しようとする協力的な姿勢を見せている。一方、インドネシア語では相手を許す「譲歩」が主に用いられていながらも相手を非難したり、情報要求も行いつつ自分の状況についても説明したりしている。インドネシア語の「被謝罪者」は、問題となっている謝罪の事柄を解決するために様々な方法を使用しつつ、「謝罪者」と積極的にやりとりを行っている姿勢を取っている。

本章で、「謝罪者」と「被謝罪者」の謝罪場面における言語行動を分析した結果、「謝罪者」が用いるストラテジーと「被謝罪者」が用いるストラテジーは相互的な関係にあり、深く関わっていることが明らかになった。この結果はボクマン・宇佐美（2005）の結果と同様であり、謝罪する側が取る方策と、謝罪を受ける側の方策とは互いに密接な関係を持っているという指摘を支持する立場となっている。

第5章 日本語とインドネシア語の謝罪行動における相互行為

第5章では、「謝罪者」と「被謝罪者」が謝罪会話においてどのようなやりとりを行っているかを【開始部】、【中心部】と【終結部】に分けて分析した。その結果、日本語とインドネシア語の謝罪会話における相互行為は以下のような特徴があると考えられる。

会話の【開始部】で見られた挨拶行動には両言語で異なっており、日本語では「注意喚起表現」、インドネシア語では「呼称」と相手の「行動に関する問答」が挨拶として特に用いられた。会話の【開始部】に含めた前触れのやりとりでは、日本語では主に「謝罪者」が発話を誘導し、「被謝罪者」はそれをサポートするように肯定的な返答で応答し、ターンを取る行動は選択しない傾向にある。一方、インドネシア語会話の前触れの行動は「謝罪者」が単独で誘導するのではなく、様々な方法を用いて「被謝罪者」を発話に関与させる行動を取っている。「被謝罪者」も積極的に発話をし、両者がお互いに情報を共有する体制を作りながら、謝罪会話の中心部分に移る姿勢が見られた。

会話の【中心部】では、「謝罪者」が多用する「明確な謝罪表明」の意味公式と「被謝罪者」が多用する「譲歩」の使用位置から両言語の謝罪会話におけるやりとりの考察を試みた。両言語ともに会話が始まされてからすぐに「謝罪者」が謝罪表明を行うことは共通している。それに応じて、日本語では「被謝罪者」が早速「譲歩」を用いて受諾するのに対し、インドネシア語ではすぐに許すことは少なく、会話の最後に「譲歩」が明示される。謝罪会話が成立したかどうかのやりとりに関して、両言語ともに「明示的に成立」と「暗示的に成立」した会話が存在したが、インドネシア語ではそれに加えて明示的にも暗示的にも成立しないまま会話が終了したという「保留」のパターンが観察できた。

両言語で「明確な謝罪表明」と「譲歩」に導くストラテジーとその後に続くストラテジーが異なっている。日本語会話では、「譲歩」→「明確な謝罪表明」→「譲歩」、また「明確な謝罪表明」→「譲歩」→「明確な謝罪表明」が行われるのに対し、インドネシア語会話では「非難」→「明確な謝罪表明」→「譲歩」、また「説明」・「明確な謝罪表明」→「譲歩」→「過失修復の試み」のやりとりとなっている。「明確な謝罪表明」と「譲歩」が併用しているストラテジーと「明確な謝罪表明」と「譲歩」の直後に来るストラテジーを照合すると、インドネシア語会話では特にそのつながりが見られ、「謝罪者」と「被謝罪者」が用いるストラテジーは密接に関係していることが再確認できた。

謝罪会話の【終結部】では両言語会話ともに類似した傾向を示している。話題転換で謝罪会話が終了することが最も多く、その次に「謝罪者」と「被謝罪者」の間で了解が交わされた時点で会話が終了することが多い。また、会話の終了を提案した側は両言語ともに「謝罪者」と「被謝罪者」が同程度であり、どちらかが会話を終了する主導権を握っているということはない。このことは、謝罪会話の【中心部】では謝罪に関する様々なやりとりが交わされ、「譲歩」が表明された後には二人の間に生じた不均衡が修復されたと思われる。それによって双方が同じ立場にあり、どちらかが優位な立場にあるという訳ではないことに理由があると考えられる。

第6章 結論

第6章では、第3章から第5章までの結論として、日本語とインドネシア語の謝罪行動ではどのようなフェイス維持が行われているのか、謝罪意識と謝罪行動はどのように関連しているかをまとめた。さらに、謝罪行動に関する日本語教育への示唆と今後の課題を述べた。

日本語とインドネシア語の「謝罪者」が用いるストラテジーをフェイス概念から考えると、両言語の「謝罪者」はともに相手のネガティブ・フェイスとポジティブ・フェイスを維持しており、ネガティブ・ポライトネス・ストラテジーとポジティブ・ポライトネス・ストラテジーをともに用いている。一方、「被謝罪者」のフェイス維持は両言語で異なっている。日本語の「被謝罪者」は相手のネガティブ・フェイスとポジティブ・フェイスを維持している。これに対し、インドネシア語では主に相手のポジティブ・フェイスを重視しているが、たまに相手のフェイスを脅かす行動も取っているという戦略的な行動を取っていることが観察できた。

第3章の意識調査結果と第4章で得た「謝罪者」のストラテジーの使用傾向を照合した結果、両者が関連していることが両言語で共通している。謝る必要性和説明する必要性の意識は実際の「明確な謝罪表明」と「説明」の使用と平行し、意識が行動に反映されている。しかし、賠償に関する意識は全体的な「賠償」のストラテジーの使用傾向から見ると、意識が行動に反映されている部分と、意識と行動が一致していない部分があった。両言語の「謝罪者」は「明確な謝罪表明」と「説明」を使用する際には意識通りに用いていることが見られるが、「賠償」に関してはする必要がない、またはする必要があると思っけていても、会話の流れややりとりによって実際に行われるかどうかが変更される可能性がある。

本研究の結果から、日本語の謝罪会話では、修復行動を協和的に進めることに重点が置かれているのに対し、インドネシア語では修復行動を戦略的に行い積極的に問題解決に挑んでいることが重要であることが明確に捉えることができた。日本語教育への示唆として、この違いについて、インドネシア語を母語とする日本語学習者が日本語でコミュニケーションを取る際に、教師は日本語の謝罪行動とインドネシア語の謝罪行動の違いに注意し誤解を生じさせないように指示する必要がある。また、相手との人間関係の修復行動となるはずの謝罪行動は、使用される謝罪ストラテジーまたはやりとりの違い

によって、逆に誤解や摩擦を生じさせ人間関係を悪化させる可能性があることを指摘し、具体的な場面を例示して教える必要があることを提案した。

謝罪行動は、言語行動のみならず、非言語行動においても、異文化による違いが想像でき、興味深い研究対象である。日本語とインドネシア語の謝罪行動の特色をより具体的に把握するために、今後は場面差、男女差、人間関係における力関係と親疎関係の差および非言語行動としての謝罪方法など、より広い視点から謝罪行動の分析を試みる必要があると考える。

【参考文献】

- 阿部加奈子（2006）修士論文『謝罪の日中対照研究』広島大学大学院教育学研究科言語文化教育学専攻日本語教育学専修 修士論文
- 池田理恵子（1993）「謝罪の対照研究—日米対照研究—Face という視点からの考察—」『日本語学』第 12 卷 11 号、pp. 13-21
- 生越まり子（1993）「謝罪の対照研究—日朝対照研究—」『日本語学』第 12 卷 11 号、pp. 29-38
- 宇佐美まゆみ（2003）「異文化接触とポライトネス—ディスコース・ポライトネスの観点から—」『国語学』第 54 卷 3 号、pp. 117-132
- 大谷麻美（2004）『謝罪と感謝の日・英対照研究—話し手の心理からの考察—』御茶ノ水大学大学院人間文化研究科国際日本学専攻 博士論文
- 大谷麻美（2008）「謝罪研究の概観と今後の課題：日本語と英語の対照研究を中心とした考察」『言語文化と日本語教育』増刊特集号、pp. 24-43
- 大橋まりこ（2007）「「まちごめん」と'I'm so sorry'—謝罪の日豪比較—」『湘北紀要』第 28 号、pp. 101-111
- 熊谷智子（1993）「研究対象としての謝罪—いくつかの切り口について—」『日本語学』第 12 卷 11 号、pp. 4-12
- クモハマド・ナビル（2007）「日本人とマレーシア人の謝罪行為の対照分析—謝罪意識を焦点に—」『比較社会文化研究』第 21 号、pp. 13-19
- 佐藤啓生（2011）「現代日本語の謝罪言葉に関する研究」『岩手大学大学院人文社会科学研究科紀要』第 20 号、pp. 21-38
- 杉本なおみ（1997）「謝り方の日米比較研究—問題点と今後の課題—」『SIETAR』第 1 号、pp. 103-120
- 高殿良博（1999）「日本語とインドネシア語における謝罪の比較」『インドネシア言語と文化』第 5 号、pp. 27-50

- 鄭加禎・上原麻子 (2005) 「謝る意識—中国人、日本人と台湾人の対照研究—」 『ヒューマン・コミュニケーション研究』 第 33 号、pp. 99-119
- 鄭加禎 (2006) 「謝罪表現義務感—日本と台湾の対照研究—」 『社会言語科学』 第 8 巻 2 号、pp. 43-52
- 鄭賢児 (2011) 「謝罪行動とその反応に関する日韓対照研究—ポライトネス理論の観点から—」 『言語・地域文化研究』 第 17 号、pp. 95-112
- 直塚玲子 (1980) 『欧米人が沈黙するとき—異文化間コミュニケーション—』 大修館書店
- 中田智子 (1989) 「発話行為としての陳謝と感謝—日英比較—」 『日本語教育』 第 68 号、pp. 191-203
- 清水崇文 (2009) 『中間言語語用論概論—第二言語学習者の語用論的能力の使用・習得・教育—』 スリーエーネットワーク
- 橋元良明 (1992) 「間接的発話方略に関する異言語間比較」 『日本語学』 第 11 号、pp. 92-101
- 橋元良明・異文化コミュニケーション研究会'91 (1992) 「婉曲的コミュニケーション方略の異文化間比較—9 言語比較調査—」 『東京大学社会情報研究所調査研究紀要』 第 1 巻、pp. 107-159
- ボイクマン総子・宇佐美洋 (2005) 「友人間での謝罪時に用いられる語用論の方策—日本語母語話者と中国語母語話者の比較—」 『語用論研究』 第 7 号、pp. 31-44
- 三宅和子 (1993) 「『詫び』以外で使われる詫び表現—その多用化の実態とウチ・ソトの関係—」 『日本語教育』 第 82 号、pp. 134-146
- Barnlund, D. C., & Yoshioka, M. (1990). Apologies: Japanese and American styles. *International Journal of Intercultural Relations*. 14. pp. 193-206
- Beebe L.M., Takahashi, T. & Uliss-Weltz.(1990). Pragmatic Transfer in ESL Refusals. In R. C. Scarcella, E. S. Anderson, & S. D. Krashen (Eds.). *Developing Communicative Competence in A Second Language*. New York: Newbury House. pp. 55-73
- Blum-Kulka S., & Olshtain, E.(1984). Request and Apologies: A Cross-Cultural Study of Speech Act Realization Patterns (CCSARP). *Applied Linguistics*. 5 (3). pp. 196-213
- Blum-Kulka S., & House J. (1989). Cross-Cultural and Situational Variation in Requesting Behaviour. In S. Blum-Kulka, J. House & G. Kasper (Eds.). *Cross-Cultural Pragmatics: Request and Apologies*. Norwood, NJ: Ablex. pp. 123-154
- Brown P. & Levinson S.C.(1978) *Politeness: Some Universals in Language Usage*. Cambridge: Cambridge University Press. (『ポライトネス—言語使用における、ある普遍現象—』 (2011) 田中典子監訳、東京：研究社)

- Goffman, E. (1971) *Relations in Public: Microstudies of the Public Order*. New York: Halt, Rinehart and Winston.
- Goffman, E. (1972) *Interaction Ritual: Essays on Face-to-Face Behavior*. Harmondsworth: Penguin. (『儀礼としての相互行為—対面行動の社会学—』 (2002) 浅野敏夫訳、東京：法政大学出版局)
- Olshtain, E., & Cohen, A. D. (1983). Apology: A Speech Act Set. In N. Wolfson & E. Judd (Eds.). *Sociolinguistics and language acquisition*. Rowley, MA: Newbury House. pp. 18-35
- Olshtain, E. (1989) Apologies Across Languages. In S. Blum-Kulka, J. House & G. Kasper (Eds.). *Cross-Cultural Pragmatics: Request and Apologies*. Norwood, NJ: Ablex. pp. 155-173
- Rintell, E., & Mitchell, C. J. (1989). Studying Requests and Apologies: An Inquiry into Method. In S. Blum-Kulka, J. House & G. Kasper (Eds.). *Cross-Cultural Pragmatics: Request and Apologies*. Norwood, NJ: Ablex. pp. 248-272
- Sugimoto, N. (2001). Evaluation of Apology Episodes in Japan and the U.S. *Ferris Studies* (フェリス女学院大学文学部紀要) . 36. pp. 35-59